

# 栄養士、近藤とし子と危機の時代の栄養学

西川和樹

## I. はじめに

一九三六年七月十日、コム・アカデミー事件に関わって近藤とし子の検挙が行われた。コム・アカデミー事件とは、共産党に関わりの深い学者や文化人に対して加えられた弾圧の一つで、日本資本主義発達史講座の研究グループに関わりの深い学者や、関連する文化団体の関係者など、合わせて三十余名が検挙された事件である。この検挙は、度重なる弾圧によって活動を断たれた党の関係者が、経済誌や文学誌を通して言論活動の継続を目論んでいるとする特高警察の見立てから行われたものだった。これに関係して、雑誌を運営する左翼系文化団体の関係者の検挙も同時に行われたが、近藤はそのうちの一人であった。この事件を報じた朝日新聞の記事には、近藤の略歴が記載されている。それによると、「昭和八年七月共産党北部地区責任者として検挙されたが執行猶予となり釈放され昨年夏機関雑誌ズドンのメンバーとして活躍中を検挙されたものである<sup>1)</sup>」。

それから約四年後、近藤が再び新聞紙上に登場した時、彼女は総力戦体制の一翼を担う栄養の専門家であった。彼女は、現場の知識を有する栄養士の一人として、食糧報国連盟主催の国民食献立協議会に出席している。一九四〇年十二月二十三日に催されたこの会議では、折からの食糧状況の悪化に端を発する国民生活の統制の一環として、「国民食」制度の実施に向けた意見交換が行われた。出席者には、大政翼賛会国民生活指導部や食糧報国連盟栄養委員の重役に加え、女子大や栄養学校に籍を置く専門家が並んだ。ここに出席した近藤は、女子栄養学園の香川綾とともに「勤労生活者の家庭や工場の実例を挙げ、材料入手難や高物価の現状」を訴えた。同会は「議論百出」のうちに閉会したようである<sup>2)</sup>。

戦後になると、今度はテレビ画面に姿を現した。今も放映の続く日本放送協会(NHK)の料理番組「きょうの料理」、一九五七年十一月四日の初回の出演者として抜擢されたのが近藤であった。数々の有名料理家を輩出してきた同番組であるが、初回の題目は「今月の食事プラン」というもので、その講師が栄養士の近藤であったことは特筆すべき事実である。放送開始翌年より刊行の始まった同番組のテキストによると、近

藤は一九五九年の夏までのおよそ二年間出演を行ったようである<sup>3</sup>。この料理番組に出演した理由について、近藤は「自分に演技力のないのは百も承知の上で、数多い料理番組のなかで一つくらいは栄養と料理を一つにして打てばボンと音の出るような仕事をしてみたい気持ちからでした」と振り返る<sup>4</sup>。

非合法活動、戦時の国民身体の養成、そして戦後の料理番組へ—このように並べられる近藤の前半生は、それが一人の女性によって短期間にたどられたとは思えない程の振れ幅を持つ。近藤については、若い頃の社会運動への関わりを皮切りとして、栄養学校の先駆けとして知られる佐伯栄養学校で学んだこと、東京市衛生試験所の見習い時代には他の栄養の専門家と幅広い人脈を築いたこと、日本初とも言われる工場専属の栄養士として集団食堂の運営に携わったこと、一方で労働科学研究所に連なる日本勤労栄養学校の教諭を務めたこと、その際に農村や炭鉱で栄養調査を行ったこと、戦後間もない時期に京都で婦人運動に関わったこと、その後厚生省栄養課の役人として戦後の栄養行政を中枢で支えたこと、同省退官後は栄養改善普及会によって民間の立場から栄養改善を推進したこと、そして「きょうの料理」第一回目出演したことなど、このように端的にまとめるだけでも極めて興味深い経歴に富んでいる。

これらの経歴のうちどこに強調点を置くかによって、それぞれ別様に異なる近藤の姿が浮かび上がるだろう。このように数年ごとに目まぐるしく活動の場所を変える近藤であるが、一九五〇年代の後半になると、自身が会長を務める栄養改善普及会に終生の活動の場を見出すようになる。この頃、近藤は自身の活動を貫く指針として「一、健康と食との平等な分配」、「二、主婦業の確立」、「三、政治と台所の直結」の三点に至ったことを述べる<sup>5</sup>。それぞれには但し書きが付けられ、「一」は憲法第二十五条、すなわち「健康で文化的な最低限度の生活」を規定した条文の実践、「二」は「主婦業を軽視している以上、人間解放も男女平等もあり得ない」、「三」に対しては「個人的な生活改善への努力は、政治の壁にぶつかってはじめてその限界を知る」として、この「限界」を明らかにすることが自身の仕事であると述べられる<sup>6</sup>。

ここには、何よりも「台所」や「生活」と呼ばれる領域を自身の活動の拠点として確保し、ここから世間に生じる何事をもまなざすこと、それから、この空間で生じる諸々の労働の価値を尊ぶこと、を基本とする台所保守とも言うべき姿勢がみられる。台所保守の思想に拠るならば、新しい価値観を築き上げることよりもむしろ、昔から変わらずにあり続けるもの、あるいはかつて存在したが忘れ去られてしまったものに価値が置かれる。しかしながら、本稿で明らかにするように、何も近藤は旧来の価値観に固執することを訴えたのではなかった。

本稿では、これまで先行研究で断片的にしか言及されてこなかった近藤の前半生を改めてたどり直すことで、一九一三年に生まれ二〇〇八年に生涯を閉じた彼女が、台所保守の考えに至った過程を考察する。その際考察の導き手となるのは、アジア・太

平洋戦争という危機に直面して栄養学が社会より強く要請されたという事実である。食糧の欠乏が人びとの生活を統制し、強健な身体の養成が国家的な課題として浮上したこの時期、栄養学に関わる学知や経験が社会に広く求められ、この分野を専門とする人びとに前例のない活動の機会が与えられた。近藤もその中の一人であった。危機の時代の栄養学は、近藤のようにこの分野を生業とする者にどのような影響をもたらしたのだろうか、本稿ではその一端を明らかにする。

## II. 先行研究 I 近藤の経歴について

上記のような道筋をたどって栄養士としての経歴を積み重ねた近藤であるが、おそらくその複雑さのために、これまでの先行研究では、彼女の経歴について断片的にしかな言及されてこなかった。例えば、日本勤労栄養学校を考察した山本唯人の論考に近藤の名が登場する<sup>7</sup>。日本勤労栄養学校は、主に工場の給食業務を担う実務者の養成を目的として設立された学校で、一九四〇年の開校から一九四六年の閉校までのあいだ、多数の栄養士を輩出した教育機関である。その設立母体は厚生省の外郭団体の勤労栄養協会で、開校後まもなくして産業報国会の傘下に入るなど、戦時体制と密接なつながりがあった。また、校長を務めたのは労働科学を専門とする暉峻義等で、彼の方法論に強い影響を受けた組織でもあった。近藤は一九四〇年より約二年同校の講師を務め、筑波の農村地帯や東京近郊の工業地域に生徒を引率するなどして、実習を基本とする教育活動を行った。山本の論考によれば、こうした手法は、実践を重んじる暉峻の方針に一致するものであったが、同時に近藤自身の現場経験にも根差したものであった<sup>8</sup>。

また、井上としは京都勤労婦人連盟を扱った論考のなかで、近藤の名前を登場させている<sup>9</sup>。京都勤労婦人連盟は、戦後の女性参政権の施行や職場での女性差別を背景として、一九四五年の十二月に設立された団体で、勤労女性の啓蒙と交流を主な目的とした。一九四八年頃まで活動を継続した後、やがてその他の婦人団体の系列へと発展的に解消していったようだ。井上の論考によれば、会長を務めた渡辺つるえには他に本職があったため、実質的な運営に当たったのは副会長を務めた近藤であった<sup>10</sup>。同連盟の企画により勤労学校や母親学校などの集まりが催されたが、近藤はこれらの機会に栄養関係の講習を行うだけでなく、婦人解放大会や民主婦人大会の折には自ら司会を務めるなど、戦後間もない時期の京都の婦人運動に重要な足跡を残した。

他にも、料理番組「きょうの料理」の歴史をたどった河村明子は、「第一回目の出演者は今も現役の超キャリアウーマン」として近藤の活動を紹介している<sup>11</sup>。これらの論考は、各時代の近藤の姿をそれぞれ興味深く捉えており、彼女の前半生を再構成

しようという本稿の目的に資するものである。その一方で、日本勤労栄養学校や京都勤労婦人連盟など、組織や団体を考察の主題としたこれらの論考では、近藤の名前が登場することはあっても、組織との関連のなかで彼女の経歴が断片的に触れられるのみで、これら複数の組織で活躍することを可能にした近藤の経験や人脈、あるいは時代背景について説得的な議論が為されているとは言い難い。

例えば京都勤労婦人連盟の考察を行った井上の論考では、主として一九七九年に刊行された自伝『根のいとなみ』を典拠として、同連盟に至るまでの近藤の経歴が紹介される。同書には栄養士として生きた彼女の半生が記されているため、これに拠るならば、戦時期より既に栄養士としての経験を積んだ近藤が、戦後のその時期、栄養関係の催しの講師を務めたことは容易に理解できる。しかし、彼女が同連盟の実質的な運営者であったことを考慮に入れるならば、近藤がどのような過程を経てそれほど力を獲得したのか、あるいは栄養士として活動をしていたはずの彼女が、なぜそれほどまでに政治活動に熱意を注いだのかという点については、この一冊のみを根拠として説得力のある議論を提示することは難しい。本稿は、具体的にはこれらの点を重要な問いとして、考察を進めるものである。

### Ⅲ. 先行研究Ⅱ 栄養学の発展について

これらの問いについては、以下考察を進める中で次第に明らかにしていくものとして、本稿ではさらに、近藤の生を読み解く際の重要な参照点として、同時代の栄養学の展開について考察を深めていく。現代の日本において、栄養に関わる専門的な業務は主に栄養士及び管理栄養士の資格を持つ者によって担われる。特に管理栄養士は、高度な知識を要する専門職として、国家試験の課される医療保健分野の難関資格の一つに数えられ、人材育成のための高等教育機関の整備が進められてきた<sup>12</sup>。管理栄養士の資格に法的根拠が定められたのは、一九六二年の栄養士法改正の時であるが、栄養士の場合には一九四七年の栄養士法の制定、あるいはその前身にあたる一九四五年の栄養士規則の交付など、先の戦争の時代にまで遡る。したがって栄養士の資格制度は、戦時体制の余波によって法制化されたものが、食糧状況や食生活の変化に伴って一九六〇年代初頭に高度な専門資格の創設へとつながり、以降教育制度や専門的な職域が整備された、という展開をたどった。こうした展開はそれ自体興味深い事実であるが、一方でこれを別の視点から捉えるならば、戦前の栄養士は、法による制度化の手前において活動を行ったことになる。すなわち栄養士の制度的展開に焦点を当てる研究では、一九三〇年代半ばより活動を行った近藤のような存在を十分に補足することができない。

戦前の栄養士の活動をたどる際に重要となるのは、栄養学そのものの展開を考察

した研究である。栄養という概念は既に明治期より存在していたが、医学や生化学の研究主題の一つであったこの分野が、それ自体専門的な研究分野として切り離され、栄養学として独立したのは大正の頃であった。近代の学知としての栄養学の発展は、ビタミンの発見を筆頭として、科学史上の重要な功績に支えられた部分も大きい。この分野の知識を要請する社会的側面一国民病とも言われた脚気の問題、貧困層や被災者の救済事業、あるいは戦時における強健な身体の育成など一の考察も合わせて重要となる。このような社会的な側面から栄養学の展開を論じた先行研究には、例えば、近藤と同時代を生きた栄養の専門家、高木和男が記した『食と栄養学の社会史』がある<sup>13</sup>。

また同様に栄養学の社会史的側面を扱った研究として、近代初期の栄養学の発展をその時代の権力の布置と関わらせながら論じた村田泰子の研究がある<sup>14</sup>。村田によれば「明治から大正にかけての国内における栄養研究への熱狂には目を見張るものがあり」、この時代あらゆる事柄が「栄養の問題として論じられ、国家による介入の対象となった<sup>15</sup>」。こうした「熱狂」の背景には、脚気の蔓延や食糧不足という国内の状況があっただけでなく、近代国家として遅れを取ったことに対する日本人の知識上、身体上の劣等感があった<sup>16</sup>。これに引き付けて述べるならば、本稿で主に取り扱う昭和期前半の時代も同様に、村田が指摘するような「栄養研究への熱狂」が継続し、これに関わる事柄は国家による重要な関心事として引き継がれた。

ところで、栄養に関わる諸事象が考察の対象として扱われる時、この分野の学知の発展や資格制度の展開、あるいは教育機関の来歴に対しては、これまでである程度の関心が向けられてきた。しかしその一方で、栄養を専門として活動を展開した個人の経歴それ自身に焦点が当てられることはほとんどなかった。これは、栄養学の創始者とも称される佐伯矩の場合にも明らかで、栄養学史の記述において佐伯の名が挙げられることは数限りないが、そうした関心が佐伯自身の生を体系的に捉えた論述につながることは稀であった。佐伯の個人史に着目し、その研究上の業績をたどることで栄養学の形成過程を考察した並松信久の近年の研究は「佐伯を対象にした先行研究は、栄養学の創始者とされるにもかかわらず、意外なほど少ない」という見解から論述を始めている<sup>17</sup>。

これと同様に、本稿で取り上げる近藤とし子を筆頭に、戦時期に栄養を職域とした人びとの経歴に関してこれまで十分な考察が行われてきたとは言いがたい。未だ栄養士が法的な根拠を持たない時期より活動を行ったこれらの専門家は、現在「栄養士」という呼称が指し示す以上の振れ幅を持って活動を展開した。彼ら彼女らは、自身の知識や技術を通行手形として、未知なる空間に赴き、異分野の人びとに出会い、新しい学知の構築に携わった。以下に近藤の前半生をたどり直す本稿は、第一に、戦時から戦後にかけて驚くほどの活動の機会を手にした一人の女性について、より精

緻な像を提出するものである。それだけに留まらず、本稿は、栄養の知識が広範に求められたこの時代の性質について、また、栄養の分野に集結した有象無象の人びとについて、新たな視座をもたらすことを目的の一つとしている。

#### IV. 自伝『根のいとなみ』

近藤の経歴をたどる際の資料についての説明を行う。近藤は折に触れて自身の経歴を書き残しており、その中で最も系統的に書かれた一冊として一九七九年刊行の『根のいとなみ』が挙げられる<sup>18</sup>。幾分紛らわしいが、近藤はそれより三十七年前の一九四二年に、同じ題名の著書『根のいとなみ 一栄養士の生活記録』を刊行している<sup>19</sup>。両者に同じ名称を付けた理由として、近藤は、最初の『根のいとなみ』が後進の栄養士に大きな影響を与えたこと、にもかかわらず、戦時期の混乱に紛れて自身の手元に同書が存在せず、その内容も失念してしまったこと、また、栄養士の仕事を植物に例えるならば、地表に結実する枝葉を支える「根」のようなものであるという自身の思いがあることを挙げている<sup>20</sup>。本稿では、一九四二年刊行のものを「第一の『根のいとなみ』」、一九七九年刊行のものを「第二の『根のいとなみ』」として言及する。

第一の『根のいとなみ』は、近藤が一九三七年より約三年間、富士電機製造で勤務していた時の経験が中心に書き記されている。彼女は工場専属の栄養士として、従業員が利用する大規模な食堂の運営を取り仕切った。同書には、この頃職場で行った様々な取り組みや同僚との関係性、仕事の際の心掛けなどが綴られている。他にも、同社退職後に彼女が行った様々な活動—農村での共同炊事の試み、鉱山における調査活動、隣組での料理講習会—についての経験も記されており、先駆者として活動を行った栄養士の心情や仕事内容を窺い知れる貴重な一冊である。また、「一栄養士の生活記録」という副題が付けられているとおり、同書は戦後の生活記録運動との重要な接続を示唆する一冊でもある。

第二の『根のいとなみ』は、幼年時代より書き起こされ、学生時代のこと、栄養学との出会い、工場勤務の経験や戦時期の出来事、戦後になって取り組んだ新生活運動、厚生省に勤務した役人時代、自身の設立した栄養改善普及会の活動など、一九六〇年代に入るまでの近藤の半生が綴られた著書である。こちらは時系列に沿って読み易く記されており、より自伝としての体裁が整えられた著書として、近藤の経歴を紹介する多くの先行研究で参照されている。

また、彼女は晩年にも『生涯現役 食の語りべ六十余年の記』と題された自伝的な著書を刊行している<sup>21</sup>。こうした自伝的著書の他にも、彼女はその他の著書や雑誌記事でも断片的に自身の体験について触れることがあり、本稿でもこれらの著作物を重要な資料としている。しかしながら、多くの自伝がそうであるように、本人の回想

を根拠とした書物には、記憶違いの箇所や意図的に隠された部分が存在する。例えば、戦中に刊行された第一の『根のいとなみ』では、その職場が軍需工場であったこともあり、固有名詞や年月の記載が皆無である。また、第二の『根のいとなみ』にはいくらか不正確な記述が存在する。例えば同書には「一九三八年の三月、私は東京は大森区鮫洲にあった国民栄養協会の設立になる日本勤労栄養学校の校務をみるかたわら、栄養指導を受け持った」という記述があるが<sup>22</sup>、日本勤労栄養学校が設立されたのは一九四〇年のことであり、設立母体も「国民」栄養協会ではなく、「勤労」栄養協会である。また、以下に述べるように近藤は著書のなかで戦前に関わった共産党の活動に触れることはなかった。本稿では、近藤に触れた先行研究や同時代を生きた関係者による回想、新聞による報道を参照することでこうした欠落を補い、ここに栄養学の制度的展開に関する考察を重ね合わせることで、一九五〇年代までの近藤の経歴の再構成を行う。

## V. 経歴 I 共産党の活動

これまで近藤の経歴がたどられる際に、ほとんど触れられてこなかった重要な出来事として、彼女が一九三〇年代に深く関わった共産党の運動がある。第二の『根のいとなみ』では「暗い空白時代」や「思想的苦悩」と記される時期である<sup>23</sup>。以下にまず、この時代に至るまでの幼年時代と学生時代をたどる。

近藤とし子は一九一三年一月七日、福井市の生まれである<sup>24</sup>。父の松井文太郎は生糸や羽二重の製造業を営み、地元の同業組合や商工会議所の要職、福井県議会議員を務めたのち、一九一七年の衆議院選挙に立候補して当選。以降衆議院議員を三期務めるなど、地元の名士であった。生家の影響であろうか、近藤の自伝には着物織物の話題が印象的に挿入されることがある。その一方で、「私の父は日頃からだ弱く、短期で怒りっぽい人で、家でも外でも気に入らなければあたり構わずどなり散らす人だった」として「私はなぜか幼い時からこのがんこな父が好きではなかった」と述べるなど、父に対しては厳しい評価を下している<sup>25</sup>。近藤の母は松井の本妻ではなく、彼女は庶子として育てられた。

一九二六年に県立福井高等女学校に入学、一九三〇年に同校を卒業して上京、津田英学塾に入学する。近藤が苦悩の時代を迎えるのはこの辺りのようで、第二の『根のいとなみ』では、津田塾で勉学に遅れを取ったことから、学内の「寮の食費の値下げ運動」や「非民主的な舎監の排斥運動」に情熱を傾けるようになり、それが原因で一九三二年に「本科一年」で退学処分を科されたことを明らかにしている<sup>26</sup>。この出来事は先行研究でも広く共有された事実であるが、それ以降の出来事は「暗い空白時代」と述べられるだけであり、先行研究でもそれ以上の言及はない。

第二の『根のいとなみ』では、「そのことについてはまたいつか書く時もあるかと思うし、また直接栄養士としての私の仕事とのかかわりもないでの、ふれずに通り過ぎさせていただく」と記される<sup>27</sup>。しかし管見の限り、近藤はその後も「思想的苦悩」の時代について詳しく述べることをしなかった。また、自身の栄養士の仕事とは関わりが無いとする見解とは反対に、以後の彼女の活動について理解を深めるという点からも、さらに栄養学の周辺に形成した人びとの関係性を明らかにするという点からも、以下の出来事が重要な役割を果たしていると思われるので、次にその詳細を明らかにする。

冒頭で述べたコム・アカデミー事件を含め、近藤は共産党の運動に関わったとして、一九三〇年代を通して少なくとも三度、特高警察による検挙を受けている。注意深く自伝を読み返すならば、津田塾在学時に宮本百合子の特別講義を受けたことや、「藤田たき先生に普選獲得運動の大会に連れて行ってもらったこともある。とりわけ黒い半衿に紫の着物を着た無産婦人運動家が、黄色い声で叫んでいたのが印象的であった」とあるなど、同時代の社会運動に対する共感が表明されている<sup>28</sup>。以下は自伝以外の資料をもとにした経過である。

一九三二年八月二八日の朝日新聞では、「津田英学塾生等十七名検挙 赤い運動が発覚」という見出しのもと、それより数日前に行われた共産党の関係者十五名の検挙が報じられている。この記事では他の検挙者に比して、近藤に対して特別な関心が向けられており、東京帝大中退の検挙者とともに例外的に名前が明らかにされ、活動の概略が伝えられた。それによると「近藤敏子は、共産党の湘南地区のレポとして平塚の関東紡績罷業の裏面で活躍したことを自白した<sup>29</sup>」。一九三二年八月というのは、その春に津田塾を放校処分となってから数か月後のことである。この記事では既に退学となったはずの近藤に「津田英学塾一年生」という肩書が用いられ、また名前に「敏子」という字が当てられるなど、幾分不正確な内容が含まれているものの、前後の事実関係を考慮に入れるならば、ここで報じられた女性は、後に栄養士となった近藤とし子に間違いのないだろう。

この検挙よりおよそ一年後に近藤は再び検挙を受けた。特高警察の資料として、一九三三年十二月発行の『特高月報』に近藤の名が挙げられている。これによると、彼女は同年八月十五日検挙、十二月二十三日起訴となっている。経歴欄のところには「黨員、昭和七年、四月中旬入党」とあり、「津田英学塾内党特別資金局関係学内責任者」、「党婦人オルグ」、「党第二群財政部責任者」の役職に就いていたことが記されている<sup>30</sup>。

この検挙に関わる報道として、一九三三年十月二十六日付の読売新聞が「元代議士の娘闘士で活躍」という記事を出している。これによると、近藤は同年九月二十一日の夜、新宿三越前で街頭連絡中のところを検挙された。彼女は津田塾退学後に「共産黨員となって資金局にも関係し学内オルグとして活躍したがその後党の重要な地位



を占めて活動を続けている」とある<sup>31</sup>。同年十二月二十七日にも「赤の松井代議士令嬢送局」という見出しの続報が出ており、中野署に検挙され取り調べを受けていた近藤が「いよいよ罪状明白」となり、市ヶ谷刑務所に収容されたことが伝えられた<sup>32</sup>。その後の報道によれば、この時彼女は執行猶予となり釈放されたようである<sup>33</sup>。

一九三〇年代の前半に共産党に深く関わった近藤の動きは、党の歴史と連動したものであった。周知のとおり一九二二年の結党以降、同党には数々の弾圧が加えられている。殊に一九二五年の治安維持法によって党活動が非合法になると、一九二八年のいわゆる三・一五事件を始めとして、大規模な一斉検挙が繰り返し行われた。弾圧の高まりによって党勢を弱体化させた党は、一九三〇年代に入ってシンパ層に広く党への参加を促すことで持ち直しを図ろうとした。こうした動きは党幹部の佐野学と鍋山貞親が獄中より転向声明を発表する一九三三年頃まで続いた。一九三〇年代の前半は、運動への大規模な動員、これに対する広範な弾圧が行われた時期に重なり、左翼運動による検挙数は一九三三年にピークを迎えている<sup>34</sup>。この時代の非合法活動に関わった多くの人びとが証言するように、検挙された党員に対しては容赦ない取り調べが行われ、近藤に対しても同様の取り調べが行われた可能性がある<sup>35</sup>。

冒頭で述べたように、それから一九三六年七月に至って、近藤はコム・アカデミー事件に際して再度の検挙を受けている<sup>36</sup>。時代の大きな流れを背景として、良家出身の子女が共産党の運動に飛び込むことは決して珍しいことではなかった。こうした意味で、自伝に述べられるように、彼女はこの時代の多くの若者が遭遇した「思想の洗礼」を通過したに過ぎなかったのかもしれない。しかしながら、数度の検挙を経てもなお、近藤は党の活動と完全に手を切ることはなかった。コム・アカデミー事件に関しては「今のところではハッキリと党の組織とまでは行っていないらしく、又明らかに治安維持法に抵触するような文書等も発見されていない模様である」と報道が伝えるように<sup>37</sup>、また事件から時期をそう隔てることなく栄養士としての活動が再開されているように、この時の近藤の拘留は短期的なものであったと推測されるが、彼女がこの時期まで党活動の周辺に居続けたことは重要な事実である。

これら諸々の出来事を経て、近藤は栄養士としての道を歩むことになるが、興味深いことに、同時代に栄養の分野に携わった者には、近藤のように共産主義の活動に接したものが少なくない。例えば、山岸晟は明治大学在学時より学生消費組合の活動に携わるようになり、同校卒業後の一九三二年に共産党に入党、その翌年に検挙されている。その後、山岸は自身も深い影響を受けた賀川豊彦の推薦で、東京江東地区の消費組合に関わるようになる。この消費組合は、栄養食配給所や共同炊事の運営など、栄養関係の業務を先駆的に行った組織であった<sup>38</sup>。山岸は『共同炊事』という共著書も残している<sup>39</sup>。山岸も近藤と同じ福井の出身であり、また近藤も賀川の活動に傾倒したことがあると記すなど、両者の共通点は驚くほどに多い<sup>40</sup>。実際に両

者は既知の関係にあり、近藤が工場栄養士となる過程では山岸が紹介役を務めるなど、両者はいずれかの活動を通して知り合ったようだ。

東京市衛生試験所時代に近藤の同僚であった高木和男もまた、一九三一年に非合法活動の容疑で検挙されている。高木の場合、自身が党に関わったわけではなく、社会主義に傾倒する友人と親しい間柄にあったことから、彼にまで検挙が及んだということであった。留置場で過ごした三週間ほどの間、高木は持病の喘息をひどく悪化させたとする回想を残している<sup>41</sup>。この出来事を一つの契機として、高木は一九三二年に東京市衛生試験所に入所、後に近藤と同僚になった。その後、産業報国会厚生部栄養部門で社会調査や教育活動に携わり、一九四四年からは労働科学研究所に在籍するなど、戦時期に至っても自身の専門を活かして十全に活動を展開した。

重要なことに、これら三名を結び付けるものに労働科学研究所がある。近藤は一九四〇年より一時期、高木の場合四四年より三十年以上、同研究所に在籍した。労務管理を専門に扱う同研究所は、早期より栄養分野における研究・調査に重点を置き、日本勤労栄養学校の設立母体ともなったが、同校には近藤や山岸も在籍している。所長を務めた暉峻義等は、戦時には大日本産業報国会の理事として戦時体制に深く関わったが、彼が率いた労働科学研究所は、近藤のような種々雑多な人びとの在籍した研究機関であり、他の左翼運動の経験者も引き寄せた<sup>42</sup>。

## VI. 経歴Ⅱ 栄養士としての活動

近藤の検挙が報じられた一九三二年から翌三三年にかけての時期は、彼女が佐伯栄養学校に在籍していた時期に重なる。近藤が学んだ佐伯栄養学校は、関東大震災の被災者救援を契機として一九二四年に佐伯矩が設立したもので、同校は開校時より卒業生に栄養士という呼称を与えていた。栄養学校の時代は、近藤のその後の活動の土台となる重要な時期であるが、在学時の回想は意外なほど少ない。自伝では同校入学のきっかけとして自身の虚弱体質を挙げているが、在学時のことになると、当時「栄養」という字を普及させようとしていた佐伯の問いかけに対して、誤って旧式の「營養」という字を用いてしまい、ひどい叱責を受けたという話が数少ない挿話の一つとして繰り返されるばかりである<sup>43</sup>。

この時期、近藤が党の活動に深く傾倒していたとするならば、栄養学校時代の挿話には事欠いたのだろうか、自伝が伝えるところによると、栄養学校の時代よりもむしろ、その後助手として入所した東京市衛生試験所の時代において、栄養に関わる実践的な知識や技術を身に着けたようだ<sup>44</sup>。近藤は同試験所在籍をおよそ二年としているので、この見習い時代は、一九三三年の夏の検挙から三六年のコム・アカデミー事件の狭間の時期に当てはまる。同試験所では、藤巻良知や有本邦太郎など、この

分野の先達の手ほどきを通して食品分析や調理学に関する知見を深め、二年目には自身でも講習を行った。近藤はここを去った後も同研究所員の調査活動に協力し<sup>45</sup>、また戦後には厚生省で有本の部下として働くなど、ここで培った栄養分野の人脈はその後の近藤の活動に大きな影響を及ぼした。

コム・アカデミー事件より数か月後の一九三六年冬、近藤は富士電機製造川崎工場の採用面接に赴いた。前述のように、両者を仲介したのは山岸晟であった。当時、山岸は江東で栄養食配給所の業務に携わっていたが、一方で富士電機製造の側では、従業員に向けた厚生事業の一環として食堂の改善を試みており、栄養食配給所の視察も行っていた。面接を経て近藤は国内初とも言われる工場専属の栄養士に抜擢され、一九三七年の初頭よりおよそ三年間この業務に携わる。近藤は、炊事長を務めた草野国松とともに、炊事場の改造に始まり、食材の買い付け、献立の作成、調理師の雇用や普及活動など、多岐にわたる業務を遂行し、千名を超える従業員の食事を賄った<sup>46</sup>。その様子については第一の『根のいとなみ』に詳しい。この経験を通して近藤は、研究室における実験に終始するのではなく、労働者の日々を支えるための実践的な普及活動に手応え感じたようである。ここでの経験は、後の共同炊事の活動や『働く女性の食生活』等の著書に結実する<sup>47</sup>。

興味深いことに、近藤は面接の際に帝国大学卒業者と同等の給与を求め、実際にそれが認められている<sup>48</sup>。その理由として、工場専属の栄養士という職業が当時他に例のなかった先駆的なものであったことが第一に挙げられるが、これに加え、近藤の働いた富士電機製造が、戦時体制に必要な物資を賄う生産工場として、1930年代後半に飛躍的な発展を遂げていたということも重要な要因であった<sup>49</sup>。他にも、彼女は在職時に戦時下栄養展示会の開催を指揮したが、こうした点は栄養士の職域が資本や国家の時局的な要求に応じて広がったことを示す重要な証左である。

一九四〇年の春、近藤は肺浸潤と診断されて富士電機製造を退職するが、その後の活動はめまぐるしい。四ヶ月の療養を終えると、同年より日本労働科学研究所研究員及びその附属団体である日本勤労栄養学校の教諭に就任する。山本唯人の研究によって確認したとおり、近藤は実習を基本とした教育活動を展開したが、農村部の活動に際しては栄養の普及活動の一環として料理講習を行っている。この時の試みについて、彼女が講習会の開催を知らせると、忙しい百姓に叱りつけられもしたが、少数の参加者を集めて会を開き、調理の際の留意点や知恵を「いっしょに実習しながら理解させていく中に、相手は異常な興味を持ちはじめ」、やがて一家の夫たちも「毎日食べていた料理の味が少しずつ変わり、おいしくなって来たことに気が付いた」と振り返る<sup>50</sup>。こうした経験はそれ自体、戦時期における生活改善の実践であると同時に、戦後の生活運動の取り組みを先取りしたものであった。

一九四〇年代に入ったこの時期、戦時色の強まりや食糧状況の悪化に伴って人びと

の自由や活力が奪われていったことは周知の事実である。これとは対照的に、こうした状況であるが故に、近藤のような栄養の専門家は社会的な使命や活動の機会を得ることになった。栄養学校での指導の傍ら、近藤は婦人労働の専門家を伴って秋田県の花岡鉦山に赴き、一月ほどの栄養調査や食生活指導を行った。また、一九四一年の春からは富士紡績の保健課に勤務して再び工場給食の業務に携わっている。それから数年のうちに、第一の『根のいとなみ』を始めとして合計三冊の著書を刊行した。戦局が進むと郷里の福井に疎開するが、ここでも児童の就労調査や配給食の料理講習を行うなど、近藤の活動は止むことがなかった。

敗戦を迎えると京都に滞在し、一九四六年より京都勤労婦人連盟の副会長に就任する。先に参照した井上としの論考によって確認したとおり、同連盟は働く女性のための文化・政治団体として戦後の京都にいち早く立ち上げられたものであった。この連盟の運営に当たった中心人物の多くは戦前の共産党の運動経験者であった<sup>51</sup>。そこで近藤は栄養関連の催しに留まらず、勤労女性の要求を訴える政治的な集会を組織した。仮に栄養士の先駆者としてその姿を描き出そうとするならば、この時期の彼女の活動は、その経歴において異彩を放つものに見えるだろう。しかし、彼女が戦前より社会運動に専心したこと、あるいはその後の活動で労働者や農民の生活に献身したことを考えるならば、栄養の視点を活動の一環として取り入れた総合的な文化・政治運動こそ、彼女の目指すべきものに近接していたことがわかる。

一九四七年の終わりになると、京都での活動を終えて上京し、今度は香川綾のもとで女子栄養学園の再建を支えた。栄養学園の創設や『栄養と料理』の刊行など、戦時期より栄養に関する種々の活動を展開した香川であるが、戦災により夫を無くし、栄養学園の建物が焼失するなど、戦後間もないこの時期は苦難の時を過ごしていた。ともに食糧報国連盟の会議に席を並べるなど、戦時期より交流のある両者であるが、この時、近藤は香川と同じ敷地に居住し、栄養学園の講師を務めるなどして栄養学園の再建に尽力した。

翌四八年の九月になると、近藤は厚生省の役人に抜擢され、公衆衛生局栄養課に籍を置く。ここで課長を務めたのは、衛生試験所在籍時の上司の有本邦太郎だった。自らが「はみ出し役人」時代と述べるこの時期、近藤は病院給食の改善や学校給食の制度構築、小麦粉を取り入れた食生活の普及に取り組むなどしたが、一方では当時の食糧行政のあり方に不信感を抱き、他方では遅々とした役所仕事の歩みに不満を感じていた<sup>52</sup>。近藤は約五年の勤務を経て厚生省を辞職するが、同時に自身が省内に設立した栄養改善普及会を独立させ、以後、民間の立場から栄養改善の仕事に携わることになる。「きょうの料理」に近藤が登場したのはこうした経歴を経てのことであった。飯田深雪を始め同番組に名を連ねた多くの料理家には、戦前の海外体験や料理学校での学びがあったことを考えると、初回に出演した近藤の経歴は極めて異

色に映る。

## VII. 危機の時代の栄養学

「戦時」から「戦後」と呼ばれる時代に重なるようにして、このように数年を待たず次から次へと現場を渡り歩く、近藤の前半生の動きはめまぐるしい。「生活」の領域が次第に戦時体制へと組み込まれ、食料状況の悪化が徐々に人びとの日常を規定するようになるこの時期、近藤の手にする栄養学の知が社会に有用なものとなされ、その活動に驚くほどの流動性が担保される。これは、例えば料理を生業とする人びとが戦中から戦後にかけて活動停止を強いられたことと興味深い対照をなす。料理家は、食糧事情の悪化によって食材を失い、贅沢を慎む雰囲気によってレシピを記す媒体を失うなどして、戦時期になると不可視の存在に陥った<sup>53</sup>。一方で栄養の知識を十全に活かして活動を行った近藤は社会に可視化された存在であった。

前述のように、並松信久は佐伯矩の業績をたどる際に、これまで佐伯の活動が大きな注目を集めてこなかったことを指摘した。その理由について、並松は「おそらく日本では栄養(学)が強く意識されたのが、震災時(関東大震災)や戦時であり、平時にはほとんど注目されなかったためであろう」と述べる<sup>54</sup>。この指摘には、単に歴史研究のなかで栄養の分野が軽視されてきたということを示す以上の重要な視点、すなわち栄養学は災害や戦争という非常時においてこそ、社会に要請される学知であるという重要な示唆が含まれている。並松も指摘するように、佐伯は、社会の危機的状況に際して栄養の専門家としての自らの職域を拡張していった。大正期に米の価格が暴騰すると、彼は限られた予算で栄養を効率的に摂取するために「経済栄養法」を推奨し、関東大震災が起こると、罹災者の救護活動や食糧の配給を率先して行った。栄養の社会史をたどる萩原弘道もまた、この頃の佐伯の活動について「関東大震災がなかったならば、これほど画期的で“有効”な実行がなされたとは思えない」と指摘する<sup>55</sup>。栄養学はその黎明期より、社会の危機に応じて求められた学知であり、その実践者である栄養士はこれに対峙する存在であった。

近藤が栄養士として活動したアジア・太平洋戦争の時代は、もう一つの危機の時代であり、栄養学に関わる諸制度は、それに対応して戦局の深化と軌を一にして展開した。一九三八年には厚生省が設立され、それまで主に内務省によって担われていた社会福祉や保健衛生に関わる業務が同省へと移管された。一九四〇年には、佐伯の設立した栄養研究所を前身とする国立栄養研究所が厚生省の管轄となり、厚生科学研究所国民栄養部と名称を改められている。この研究所によるものを含め、国民の栄養基準策定に向けての動きがこの時期より活発となり、近藤も食糧報国連盟の会合に出席したことは冒頭で述べたとおりである。栄養士関連のものとして、

一九四四年の大日本栄養士会の結成、翌四五年四月の栄養士規則制定が続き、ここに至って栄養士の職務に法的な根拠が与えられることになる。同時に、私立栄養士養成所指定規則も合わせて公布され、これによって、佐伯の栄養学校や香川の女子栄養学園、近藤が教諭を務めた日本勤労栄養学校など、十二の教育機関が栄養士の養成機関に指定された。

こうした戦時の力学のなかで、栄養学が近藤のような女性に活動の機会を与えたことは重要な事実である。時代は少し下るが、占領期の沖縄を考察の対象とした小碓美鈴の研究は、同様のことが家政学の周辺に生じていたことを明らかにする<sup>56</sup>。家政学は、栄養の分野を構成要素の一つとしながら、家庭内の近代化や合理化を推進する学知の一つとして、女性に専門的、自律的な活動の機会を与えてきた。冷戦統治という大きな政治的力学を背景にして、沖縄では、設立間もない琉球大学にミシガン大学から家政学者が派遣されるなど、この学知を媒介にして国際的な人的交流が推進された。小碓が強調するように、琉球大学の家政学者は、学生に対する教育活動に貢献したことはもちろん、この力学のなかで一般住民に対する普及活動や海外の家政学者との交流を進めるなど、占領期としては例外的な流動性が確保された。

その事例として取り上げられる翁長君代の生涯は、近藤の活動の展開を考察する際に極めて示唆的である。東北地方を出自とする翁長は、自身の得た家政学の学知を頼りに、戦前より植民地下の朝鮮に渡り、そこで家事の知識の普及に携わった。戦後は占領下の沖縄に拠点を移し、琉球大学の家政学部の教員に就任する。彼女は特別仕様のステーション・ワゴンに台所用具を詰め込み、県内各地の主婦を対象として料理講習を行うなど、現場に根差した活動を重視した。沖縄の食生活や伝統料理を紹介した『琉球料理と沖縄の食生活』という料理書の刊行もある<sup>57</sup>。家庭に関わる専門的な知識を有する翁長は、危機の時代を生きたが故にそれだけ一層可視的な存在となった。

近藤とし子が、戦時期に至ってこのように目まぐるしく活動の場所を変え、研究機関や教育機関に留まらず、工場や農村にまで栄養の知識や経験を及ばせたことは、全てが戦争へと繋がり得る戦時の動員体制と不可分のことであり、ここに「危機の時代の栄養学」と近藤がたどる生の一致をみることになる。

## VIII. おわりに

本稿では、近藤とし子の一九五〇年代に至るまでの前半生をたどり直した。名望家の父のもとに生まれた近藤は、上京して一九三〇年代の共産党の運動に傾倒するようになる。数度の検挙を経た後、栄養学を志し、見習い時代を経て工場栄養士として活躍し、戦時期は栄養の専門家として各地で栄養調査や講習会を行った。戦後にな

ると、京都で婦人運動を指揮したかと思うと、女子栄養学園の再建に尽力し、やがては厚生省の役人となり、テレビの料理番組にも出演する。以上のようにたどられる近藤の前半生は、通常の「栄養士」の枠組みには収まりきらないものであった。

このように複雑な展開をたどった近藤の軌跡を考察するための背景として、共産党の活動、危機の時代の栄養学、あるいは戦後の「生活」の焦点化など、複数の重要な主題が挙げられる。さらに先に参照した小碓の研究は、近藤の活動を枠づけるより大きな力学を浮かび上がらせる。同研究は、琉球大学の家政学者が、戦前の帝国日本と戦後のアメリカという二重の帝国主義に枠づけられた存在であることを指摘する<sup>58</sup>。その意味で、戦時期には産業報国会や食糧報国会との繋がりを持ち、戦後には厚生省で粉食の普及活動を行った近藤もまた、敗戦に至る帝国日本や冷戦時代のアメリカの力学に接する存在であった。

しかしその一方で、共産党の運動に深く傾倒した近藤は、社会の治安を乱す存在として帝国から排除される存在でもあり、在職後まもなく厚生省を退官した近藤は、国の推進する食糧行政に完全に同調したわけではなかった。何よりも、栄養の知識を背負い込み目の労働者や農民に立ち向かう姿、その個々の具体的な場面からは、戦争遂行の問題よりはむしろ、日々を生き抜こうとする覚悟もまた浮かび上がり、近藤の生はこの両者の緊張関係のうちに描出されるべきものである。

本稿では近藤の活動をたどる際の重要な要素として、一九三〇年代の社会運動の経験があることを明らかにしたが、しかしこれによって、彼女が栄養士を仮の姿として以降も党の地下活動を行ったと述べるのではない<sup>59</sup>。重要なのは、こうした運動を通して近藤が政治と台所をつなぐ契機をつかんだということであり、一時は無産運動に傾倒した彼女が、その後も栄養の視座を通して労働者や農民に関心を注ぎ続けたことである。集団食堂の運営や共同炊事の取り組みはその一つの重要な結節点であり、この点から、近藤は共産党の教義には縛られない、また一つの共同性を志向していたと言うことも可能である。栄養士に法的な根拠が与えられようとするまさにその時期、彼女は自身の職務について次のように述べる。「保健婦さんは私ども栄養士よりもスケールが大きくて、栄養士というものが行き詰って居るのではないかと考えるのです。栄養思想だけでなく生活全般のことを教えてあげなければならぬと考えます<sup>60</sup>」。ここに「生活」という語句が浮上しており、近藤の志向した新たな共同性を読み解く際、この言葉が重要な鍵となることが示唆されるが、これについては、本稿では十分に果たせなかった後半生をたどり直す作業とともに、稿を新たに記されるものである。

## 注

- 1 「仮面の文化団体に今晚総検挙の手」『朝日新聞（夕刊）』（1936年7月11日），2.
- 2 「“献立”に議論百出 国民食の協力会議」『朝日新聞（朝刊）』（1940年12月24日），7.
- 3 近藤はテキスト『NHKきょうの料理』一九五八年五・六月号の創刊号より一九五九年の七・八月号まで「今月の食事プラン」を担当している。
- 4 近藤とし子『食事のプラン』（柴田書店，1960）。同書「まえがき」より引用。
- 5 近藤とし子『私の栄養指導』（光生館，1958），1.
- 6 *Ibid.*, 1.
- 7 山本唯人「工場給食運動と総力戦下の女子専門教育—日本勤労栄養学校の足跡」田崎宣義編『近代日本の都市と農村 激動の一九一〇—五〇年代』（青弓社，2012），259-289.
- 8 *Ibid.*, 267-268.
- 9 井上とし「京都勤労婦人連盟」京都の民主運動史を語る会『燎原』第210号（燎原社，2014年1月），8-11. なお井上による「京都勤労婦人連盟」は全五回の連載であり、『燎原』第210号の他に第212号（2014年5月）、第213号（2014年7月）、第214号（2014年9月）、第215号（2014年11月）に掲載されている。
- 10 *Ibid.*, 10.
- 11 河村明子『テレビ料理人列伝』（NHK出版，2003），27-29.
- 12 栄養士及び管理栄養士に関する制度や教育機関の展開に関する研究として、鈴木道子による次の二つの研究を参照。鈴木道子「日本における栄養士・管理栄養士制度と養成システムの変遷」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第57号（東北大学大学院教育学研究科，2008），445-457./鈴木道子「栄養士・管理栄養士養成機関の多様性とその変遷」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第58号（東北大学教育学部，2009），33-56.
- 13 高木和男『食と栄養学の社会史』（科学資料研究センター，1978），特に近代以降の栄養学の展開と社会的事象の考察を行った第二巻を参照。
- 14 村田泰子「栄養と権力—明治大正期における栄養学の成立と展開」『ソシオロジ』第45号第3巻（2001年），69-84.
- 15 *Ibid.*, 71.
- 16 *Ibid.*, 72-81.
- 17 並松信久「栄養学の形成と佐伯矩」『京都産業大学論集 社会科学系列』第34号（2017年），26.
- 18 近藤とし子『根のいとなみ』（草土文化，1979）.
- 19 近藤とし子『根のいとなみ 一栄養士の生活記録』（料理の友社，1942）.
- 20 『根のいとなみ』（1979）「まえがき」を参照。
- 21 近藤とし子『生涯現役 食の語りべ六十余年の記』（ドメス出版，2000）.
- 22 近藤『根のいとなみ』（1979），48.
- 23 *Ibid.*, 16.
- 24 同郷には戦後、参議院議員や主婦連合会の会長を務めた奥むめおがいる。両者は同じ福井市の出身であるだけでなく、家同士で付き合いがあり、奥が福井に講演に訪れた際には、近藤がその会場の外で、奥の娘の紀伊の世話をしていたという逸話も残されている（『新入国記83（585）奥むめお 中村紀伊 近藤とし子 野田佳江 ほか』『朝日新聞（夕刊）』（1983年9月14日），1）。奥は、近藤が戦後の京都で婦人運動に取り組む際の導き手になるなど、近藤の経歴にも重要な影響を与えている。
- 25 近藤『根のいとなみ』（1979），9.
- 26 *Ibid.*, 15-18.
- 27 *Ibid.*, 17.
- 28 *Ibid.*, 17.
- 29 「津田英学塾生等十七名検挙 赤い運動が発覚」『朝日新聞（夕刊）』（1932年8月28日），2.



- 30 内務省警察保安局保安課編『特高月報 昭和八年十二月分』[復刻版] (政経出版社, 1973), 6.
- 31 「元代議士の娘 闘士で活躍」『読売新聞 (朝刊)』(1933年10月26日), 7. なおこの記事と『特高月報』内の記録のあいだには、検挙の日付に関して一月ほどのずれが存在する。
- 32 「赤の松井元代議士令嬢送局」『読売新聞 (夕刊)』(1933年12月27日), 2.
- 33 「仮面の文化団体に今晩総検挙の手」『朝日新聞 (夕刊)』(1936年7月11日), 2.
- 34 当時の検挙の詳しい状況については次を参照。「たとえば、一九三三年の治安維持法違反検挙人員は一万四千六百二十二名と史上最高を記録したのだが、このうち起訴された者は千三百名弱、それに対して、起訴猶予千五百名弱、留保処分を受けた者は千名強である (残りは釈放)」(立花隆『日本共産党の研究 (下)』(講談社, 1978), 273)。
- 35 この頃の留置場の様子について宮内勇は次のように述べる。「大抵の留置場は警察署の一番奥の土間のうすぐらい一角にある。三畳くらいの監房が板壁で仕切られて四つくらい、それと向かい合ったところに畳敷きの女性用監房が一つ。「監房の中は板敷の上に莫塵が敷いてあり、入監者たちは三方の壁に背をもたせて、取調べでもない限り一日中向き合っただけで坐っている。横に寝ることは就寝時以外、一切許されない」(宮内勇『1930年代日本共産党私史』(三一書房, 1976), 33)。宮内は主に中野署の経験をもとにこれを記しており、近藤もまた一九三三年に中野署に検挙されたことから、あるいは同様の経験をしているかもしれない。
- 36 この事件に関する特高警察側の資料として次を参照。内務省警保局保安課『特高外事月報 昭和十一年七月分』[復刻版] (政経出版社, 1973), 5.
- 37 「仮面の文化団体に今晩総検挙の手」『朝日新聞 (夕刊)』(1936年7月11日), 2.
- 38 栄養食配給所とは工場を対象とした給食制度の一つであり、近隣の工場に栄養価の高い食事の提供を行った。一九三三年に埼玉県川口に設けられたのを皮切りに、一九三七年の時点で関東地区を中心に全国で五十四ヶ所が設置されるなど、緩やかな広がりをみせた (高木和男「栄養配給所の過去と展望」『労働の科学』第16巻11号 (大原記念労働科学研究所, 1961), 48-56)。なお山岸自身の共同炊事の回想としては次を参照。山岸晟「栄養食共同炊事の思い出」『労働の科学』第14巻12号 (大原記念労働科学研究所, 1959), 26-27.
- 39 森川規矩、山岸晟『共同炊事』(科学主義工業社, 1941) .
- 40 近藤とし子『根のいとなみ』(1979), 16.
- 41 高木和男『高木博士のアレルギー抵抗記』(芽ばえ社, 1989), 42-47.
- 42 労働科学研究所について「医学、心理、建築学、化学、経済学その他の若手の熱心な研究者を採用して、百人を超える研究機関になっていった。そうしたなかで、暉峻はかつての左翼運動の経歴者をあまり詮議立てしないで、研究の熱意があれば採用している。産業報国会に統合されたのちにこうした研究者がレッド・パージにかかったあとも、別枠で給料を出して、正式所員と区別せず研究に従事させたほどである」という記述がある (三浦豊彦『暉峻義等 労働科学をつくった男』(リプロポート, 1991), 228)。
- 43 近藤『根のいとなみ』(1979), 19-20. また近藤は共産党所属の衆議院議員、中林よし子との後年の対談においても同様の挿話を繰り返している (近藤とし子・中林よし子「食は命の源なり」日本共産党中央委員会『女性のひろば』第275号 (2002年1月), 36).
- 44 近藤『根のいとなみ』(1979), 22-28.
- 45 例えば次の有本や高木の関わった調査では、当時近藤の在籍した富士電機製造における栄養調査が行われており、末尾には近藤に対して謝辞が記されている。有本邦太郎、高木和男、嵯峨喜一郎、武田正作「工場に於ける栄養調査 (第2報)」『醸造学雑誌』第17号3月号 (大阪醸造学会, 1939), 192-202.
- 46 海軍経理学校で給食業務を行った経験を持つ草野国松は、その後、再び戦地へ赴いたと伝えられている。草野は富士電機製造での食堂業務を通して得られた知見を『栄養と料理』に寄稿しており、食堂の献立を公開している (草野国松「団体炊事の再検討に就いて」『栄養と料理』第6巻7号 (1940年7月), 85-93)。

- 47 近藤とし子『働く女性の生活指導』（協和書房，1944）。
- 48 近藤は同社面接の際、栄養士の重責を説くなかで当時の帝大卒業者と同等の七十五円の給与を要求し、採用時に認められている（近藤とし子「食生活の改善を歩きながら考えた40年一草の根の栄養改善運動を全国で進めて一」『生活協同組合研究』第200巻（9月号）（生協総合研究所，1992），14）。
- 49 同社発行の社史によると「昭和6年度と同12年度とを比較すると、受注高は8.6倍に、生産高は7.3倍に、売上高は4.6倍に、純益金は7.8倍にと画期的な飛躍を遂げたことが判る」、「この異常な発展はいうまでもなく軍備拡張による軍需品の発注増加、満洲国国土開発機材の需要、国内電源開発に伴う電機類の需要旺盛などに原因するものであった」とある（富士電機製造株式会社社史編纂委員会編『富士電機社史 1923-56』（富士電機製造，1957），39）。
- 50 近藤『根のいとなみ』（1979），52。
- 51 「勤婦の実質的運営を牽引していたのは横地章子、近藤とし子、児島とみ、（他に橘高喜代子《島津三条労働者》）らの治安維持法下で抵抗運動にかかわった女性共産党員であったといわねばならない。近藤については確認がとれないが、横地は「津田塾出身、戦前検拳の経験がある」といっている」とある（井上とし「京都勤労婦人連盟」『療原』第215号，12）。
- 52 近藤『生涯現役』171-184。
- 53 戦時期の料理家の活動については未だ明らかでない部分が多いが、例えば東佐与子を論じた拙稿を参照（西川和樹「料理家、東佐与子—パラノイアと呼ばれた料理家」『文化／批評 [cultures/critiques]』第9号（国際日本学研究所，2018），3-20）。戦前より料理家として精力的な活動を行った東であるが、食糧状況の悪化から戦時には自身の料理講座を維持するのに手一杯となり、やがては体調を崩して療養生活に入った。
- 54 並松，26。
- 55 萩原弘道『栄養と食養の系譜 主食論争から健康食品まで』（サンロード，1985），90。
- 56 Mire Koikari, *Cold War Encounters in US-Occupied Okinawa, Women, Militarized Domesticity and Transnationalism in East Asia*, (Cambridge University Press; Cambridge, 2015) . 特に琉球大学の家政学者を論じた第五章 "Mobilizing homes, empowering women: Okinawan home economists and Cold War domestic education" を参照。なお同書の主題を論じた書評として拙稿「皮肉から紡がれる歴史—書評：Cold War Encounters in US-Occupied Okinawa」『同志社グローバル・スタディーズ』第7号（2017年），127-130。
- 57 翁長君代『琉球料理と沖縄の食生活』（績文堂，1969）。
- 58 Koikari, 150。
- 59 とはいえ、かつて戦後の共産党が武装闘争の路線を打ち出した際、当局の監視を逃れるために『栄養分析表』や『新しいビタミン療法』という書名のもと、武装闘争の方針や爆弾の製造法を記した文書を頒布したことが知られている。共産党と栄養分野の親和性を物語る挿話の一つである。
- 60 「座談会 挺進する栄養士の体験」『料理の友』第31巻第8号（1943年8月）（料理の友社），37。

付記：原則として引用中の漢字は新字に改めた。なお、本稿は第三十二期・第三十三期火曜会における報告と、その後の議論に基づいている。ここに謝意を記します。

## Abstract

# The earlier life of Kondo Toshiko and the development of nutritional science

In this essay, the amazing life-history of Kondo Toshiko, who was born in 1913 and died in 2008, is traced with a special focus on her involvement in the Communist Party movement of early 1930s. Additionally, also by tracing the history of nutritional science, the essay makes it clear that the life of Kondo goes hand in hand with the growing demand for knowledge and experience concerning nutrition in the context of the Asia and Pacific War, which provided Kondo with extraordinary mobility and various opportunities to share her expertise.

Kondo has been known for her pioneering career as a nutritionist. Born in Fukui Prefecture, she came to Tokyo in early 1930s and decided to learn nutritional science, which had yet to become a widely accepted discipline. After graduating from a vocational school, she joined a research institute as an intern, where she acquired practical knowledge and met some professionals majoring in this field. Then, she was allowed to work for Fuji Denki Seizo Corporation as a full-time nutritionist, actively operating the job of serving workers with meal.

Despite an escalation of the war damaging every aspect of everyday life at that time, her aspiration was never discouraged; on the contrary, the worse the situation became, the more energy she acquired, it seems. After the retirement of the corporation, she continued her career as a nutritionist during the war, sometimes sharing her experience with students at a school, conducting a research in plants, and practicing a cooking workshop in rural areas at other times. Kondo even joined a national conference in 1940 where various professionals gathered to discuss the standard of nutrition among citizens.

Since deficiency of food prevailed among society also after the war, the demand for Kondo's expertise never ceased. She stayed in Kyoto after the post-war era, where, as a vice president, she led the women's movement established for working women. In 1948, she returned back to Tokyo in order to help

another nutritionist, and then, was soon selected as a bureaucrat agent for Nutrition Division of Health and Welfare Ministry, an extraordinary promotion. After a hard struggle for five years, she made a decision to become independent as a head of a nutritional organization in a private sector.

Although certain amount of attention has been paid to Kodno's life, some facts are missing in preceding studies, which are her involvements of Communist Party movement. In her early twenties, Kondo was arrested at least three times for illegal activities. As documents and other articles in newspapers reported, Kondo played a prominent role related to Party's local financial bureau and women's division. By taking this incident into consideration, it becomes possible to grasp a complicated figure of a female nutritionist working during the war, as well as the complex development of nutritional science itself which has close relationship to the crisis in society.